

C・B・Cの生活

わたしたちの神学校は全寮生の形をとっているの、学生は全員入寮することが原則となっています。志を同じくする者が一つ所に集められ、寮生活の中で訓練を受けることは、実に幸いなことだと思います。

現在男子寮一名、女子寮一名、合計二名の学生が寮生活を続けています。寮は建物こそ古いけれども、贅沢さはいわなければ、設備の整った快適な住まいです。部屋は一室に二、四名が入り、共同生活をしています。年に二回部屋替えがあり、その都度いろいろなタイプの人と同室になるので、変化に富んでなかなか楽しい生活です。神学校の一日は、原則として次の通りです。

六・三〇起床、清掃、七・三〇ラジオ体操、七・一〇朝食、八・二〇チャペル、九・〇五授業開始、一一・一〇昼食、一三・〇〇授業、一五・〇〇授業終了、一七・〇〇夕食、一八・三〇自習、一三・〇〇就寝。

月曜日は午前中が作業で午後は休み。自主的に行なう早天は五時三〇分からは学生伝道集会がもたれ、幸いな集会を開いています。

このような一週間は、またたく間に過ぎてしまいます。実際に寮生活をすると、一日はほんとうに短いのです。レポートに追われる時もある、信仰談話に花を咲かせることもあります。時には雑用の為に時を過ごすこともあります。一日が三〇時間あったらどんなに幸いだらうと思います。

寮生活は自分でコントロールしなくてはなりません。寮生活を有意義なものとするのも、無意味なものとするのも、個人々々の意識の持ち方によるでしょう。その意味で寮生活は楽しくもあり、厳しいものでもあります。(F生)

女子寮のこえ

入寮する為にはどんな準備をしたらいのですか？との質問に答えて女子の立場から一言。

キリストの召しに応じる献身の初心が第一です。これがあればどんな状況にも対応していけます。わたしたちは寮生活をしますから寝食を共にすることになります。「人は人によって研がれる」と言いますが、この生活こそわたしたちにとってなくてはならない自己訓練の場です。より良く神に仕えていく為に互いの持ち味を生かし合っている共同生活で、わたしたちは多くのものを分か「ええ、また吸収し合え

角があなたの来るのを待っています。(O生)

学校ニュース「中央聖書学校だより」

発行に当たって。

従来、中央聖書学校のコミュニケーション(通信・連絡・広報)は、主として教会を通して、または教会担任の先生を通して行なわれて参りました。それは、教団機構の中の聖書学校という位置付けによると思われれます。しかしこのたび、新規の施行にもとない学校のニュースを直接、折にふれて、一般クリスチャンの方々へお知らせするように導かれました。日頃、お祈りいただいている皆様のところへ、生の声を聞いていただいたり、学校生活を直接知っていただくためです。今後、一層ご加勢下さいますように願ひ致します。また、このニュースについてのご質問や便りがありましたら、編集者のもとへどしどしお送り下さいますように合わせてお願い致します。

発行・一九七八年一月

事務局・〒二〇三・三六二 四九二五

東京都豊島区駒込三二五三

中央聖書学校内

編集者・佐布正義

日本宣教の原点

中央聖書学校の働き



(弓山校長)

語っています。

「時代の要請によって、聖書学校の学的水準が引き上げられ、社会の要求に応えられるものでなければならぬことは申すまでもないことです。またそれにともなう学校制度の変革や改正も必要となるでしょう。しかし、それは、本校の建学の精神である福音宣教師の養成の緊急性に依拠していることを犠牲にしてしまうものであつてはならないと信じております。新年度からの教育にはこの両者が充分調和されて現わされると思います。わたしの切実

り出すことのできる人とならなければなりません。

同時に、宣教の対象となる人々をよ

C・B・Cに期待すること 伊藤 顕栄

く理解し、また福音伝達の技術に秀でることも必要です。現代人に、彼らの理解できる言葉で、御霊の力とともに

福音を伝える説教者、伝道者、教師が育つていかねばなりません。

また、ことばは受肉しなくてはなり

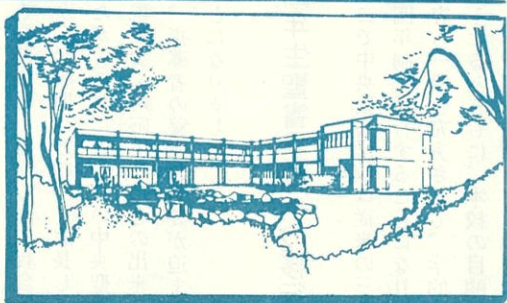
ません。宣教者一人一人が

神の御霊に満たされ、みこ

とばを実践し、キリストの

御姿を映す者でなければなりません。

CBCがこういう人材を養成する道場となることを心から期待します。

中央聖書学校
〈C・B・C〉だより

新制度の中央聖書学校



(写真校門)

中央聖書学校はその前身である聖霊神学院（昭和四年弓山師により神召教会内に設立）時代から今日まで伝道者の養成機関として大きな役割を果たしてきました。

昭和二十六年に中央聖書学校の第一回卒業生を出してから今年で二十七回、三百三十八名の卒業生を国内外に、主の働き人として送っています。

この間、戦後の荒廃した社会から、高度成長時代、さらに福祉国家を目指して時代は推移し、社会状況は大きく変化してきました。こうした各時代に対応して福音は高く掲げられ、教会は開拓期から形成期へと向って成長してきましたが、これにともない中央聖書学校は現社会に対応することの出来る伝道者、指導者の養成の必要が迫られることになりました。

四年生聖書学校への移行

そこで中央聖書学校は従来の三年制より四年制に移行することになり、教科内容も一段と充実させて、学的水準を高くするとともに、本校の目的と使

新しい学校組織
新制度の中央聖書学校には「学校理事会」と「教授会」とが設けられ、それぞれ「学校規則」に基づいて運営されます。

学校理事会は教団理事長をはじめ、教団理事会からの代表者二名、教団総会の代議員の中から二名、学校からは校長と他に教授会から一名、宣教師会の議長、それに中央聖書学校後援会からの代表者一名の合計九名をもって構成され、学校の重要事項はここで審議決定されます。

発足当初の教授会は学校理事会と教団理事会の合議の上で推薦、任命された教授によって構成され、その学問的分野は聖書神学部門、組織神学部門、実践神学部門で、学校教育はもとより教団の学問的啓蒙の重要な働きを担っています。なおその他の職務としては教務主任、学生主任、舎監としての働きがあり、これらを通じて直接、学生の指導に当たります。

新制度の特長

これまでに述べたように、従来の中央聖書学校はここに大きく飛躍して、新しい発足を見たが、その機構に

見るように教団の総意が反映できる組織となったことが特長です。
また、教授会に対してはその主体性が尊重され、同時にまた、学校自体が神学的研究機関としての役割を持ち、教授会がその中心的な立場をとっていることも特長として、あげられます。さらに新しく設立された中央聖書学校後援会の位置づけも、今回の改正点の一つです。これは広く教団内からの財政的支援を目的としたもので、後援会はこうした面から大きな貢献が期待されています。すでに本年はその最初の献金として同会から八十万円がさげられています。

新制度への期待

冒頭に記したように従来の中央聖書学校は聖霊神学院が発展した形において生まれたものでしたが、ここにさらに新しい形が整えられて、スタートしたのが今回の新制度による中央聖書学校です。陸上競技の三段跳びで言えば、ホップ・ステップ・ジャンプと跳躍が期待されているのが、現在の学校だと言えましょう。いよいよ、本年の新生からは新制度のカリキュラムが適用されることとなります。全国諸教会の祷告が、切に求められる次第です。

重荷を負う者たち



(CBC教師たち)

中央聖書学校の教師は現在十四名で、そのほとんどが伝道・牧会にたずさわりながら、その長い経験を生かして、それぞれの授業を担当しています。

本校は一年二期制（前期・後期）を

とつていますが、ちなみに昭和五二年後期のクラスを担当教師を紹介しますと、次のようです。弓山先生（ロマ書）、伊藤先生（聖書緒論、黙示録、聖霊論、スピーチ）、佐布先生（組織神学、解釈学、ギリシャ語）、山城先生（教理、ヨハネ伝、国語、英語）、細井先生（獄中書簡、会議法）、石原先生（小預言書）、マリヤ先生（儀型論）、吉山先生（コリント書）、白石先生（教会史、西洋史）、佐布トシ子先生（新約概論）、大森先生（音楽、指揮法、オルガン）、仁司先生（旧約概論、アッセンブリー史、ギリシャ語）、フラハン先生夫妻（英語）。

これを見てもわかるように、一人でも二つ以上のクラスを受持っている先生方もおられ、教師と牧師の両方をこなしてゆくのもなかなか大変です。私は二足のワラジをはいているつもりはない。一足のワラジであちこちを歩きまわっているだけであって、聖書学校で教えることが、そのまま牧会・伝道や説教に刺激を与えたり、生かされている」と語られる佐布先生の言葉は、他の教師たちの気持を代弁しているともいえます。

伝道者養成を第一目標とする学校として、つねに理論と実践の調和を心がけねばならないのは当然であり、この

点については十分な配慮は行われていきます。教師はそれぞれ十年、二十年の牧会・伝道の経験を生かして授業をすすめているので、学生たちは第一線に出るまえから、伝道者の苦勞、喜び、厳しさをはじめ、伝道・牧会の実際をいろいろな角度から聞かされるわけです。学校の中心である伝道のスピリットとビジョンをもちつつ、かつアカデミックな授業をすすめたい」（白石先生）「頭の中だけではなしに、心にふれるような点、霊的面に注意する」（吉山先生）などの声にも、将来の伝道者を養成しようとする教師の姿勢がうかがえます。「これは説教のいいポイントになる」などと、学生が第一線に出てまず直面する（説教づくり）のための配慮がなされるのも、聖書学校ならではのことで、各教師は「いかにして聖書のメッセージを学生にたたきこむか」（石原先生）に心をくだいています。

また、日本語で書かれた旧約聖書の註解書は非常に少ないので、みなさんそれぞれ苦労してこられたと思います。しかし、註解書はあくまで情報（インフォメーション）の提供や、聖句についての意見を聞くといった補助的手段として用いられるべきで、それに全く頼り切るという態度は改めなければなりません。註解書なしでも、聖書辞典、

コンコルダンス、聖書地歴、考古学、聖書緒論、聖書概論などの知識と聖書を注意深く何度も自分で読むことによつて、学生が自分で聖書のメッセージを正しくつかむことができるようにしたい（仁司先生）との願いも結局は、学生たちが聖書学校を出てからのことを考えてのことです。

「すくなくとも世間の人は、牧師・伝道者が聖書や神学の点ではプロであることを期待している」（仁司先生）、学生たちが在学時代には真剣に勉強することを、教師たちは願っているし、教える側も準備は「充分にして、生々とした興味ある授業をしたい」（細井先生）と願っています。図書館の充実を願う（山城先生）声が教師の中から聞えます。

そこで、この学校の教師会では、授業中の学生の意欲の問題が真剣に話し合われたり、健康管理から生活の面にも及びます。学生の成長や講義をどう受けとめているかが、やはり関心のまです。教師として一番うれいし時は、との質問に対してフラハン先生は、「（へああ、なるほど、わかった）」と学生が言うとき、「一番うれいしです」と答えています。このように教師たちは常に頑張っています。